

# アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.203

July 2020

## 世界文学として読むエズラ・パウンド

長畑明利

アイダホ州に生まれ、フィラデルフィア近郊で育った詩人エズラ・パウンドは、1908年にアメリカを去ってヨーロッパへ渡り、ロンドンに12年、パリに3年、イタリアのラバッコほかに22年住んだ。第二次大戦末期に捉えられ、ピサの囚人キャンプに入れられた後、ワシントンへ送られ、反逆罪の裁判を受けたが、裁判に耐えられる精神状態にないとされ、12年間を当地の病院で過ごした後、結局、国外追放となり、再びイタリアの地を踏んだ。戦前の短期間の帰国を除き、彼は生涯の大半をアメリカ国外で過ごした。しかも彼は1920年代にムッソリーニとファシズムに感化され、1940年代には、ローマからのラジオ放送で、イタリアと戦おうとする合衆国を攻撃する放送を行った。

こうした事実を前にしたとき、人はパウンドをアメリカの詩人として考えることを疑わしく思うかもしれない。もちろん彼は生まれも育ちもアメリカであり、教育もアメリカで受けている。長きにわたる国外生活にもかかわらず、彼は自分をアメリカ市民として認識していた。作品にもアメリカ的要素は濃い。代表作『詩篇』は古今東西の文学作品や歴史文書の断片や、パウンドが耳にした同時代人の発言などをちりばめた、壮大な引用のコレクションとも見なしうる作品だが、そこにはジェファソンをはじめとする「建国の父祖」を題材とする詩篇が含まれ、中盤には、第2代大統領ジョン・アダムズを扱う10篇からなる詩篇（「アダムズ詩篇」）もある。また、パウンドの革新的な詩法はアメリカ由来のものとは言い難いものの、表現を曖昧にする形容詞や抽象的表現を廃し、モノの直接的な提示をよしとするそのスタイルは、後続のアメリカの詩人たちに大きな影響を及ぼした。こうした点からすれば、アメリカを離れて生活し、アメリカを非難するラジオ放送を行ったにもかかわらず、パウンドをアメリカの詩人とする妥当性はある。

このことは、しかし、近年顕著になってきた、アメリカ文学を世界文学として見る見方に照らし合わせて考え

ることもできる。たとえば、ワイチー・ディモックはすでに2007年に、一国文学の、また合衆国中心の視点に立つ文学カテゴリーの切り分けに異を唱え、代わりに、それをより大きな文学的連続体の一部と捉え、両者の関係をより流動的に見ることを唱道している（Dimock and Buell, eds., *Shades of the Planet: American Literature as World Literature*）。そしてディモックは、従来アメリカ文学という範疇の枠内で論じられがちであった様々な文学テキストを、範疇の境界を越えて、地理的にも時間的にも（またジャンルの上でも）大きく離れたテキストと結びつけ、意外性に富んだ読解を披露した。たとえば、「感性の普遍性」という観点に拠って、ほかならぬパウンドのテキストとカントの『判断力批判』を連結してみせる考察などはその一例である。

ディモックが構想し実践する、時代を越えた複数のテキストの関連づけは、異なる時代の様々なテキストを同一テキスト内に併置したパウンドの試みを彷彿とさせるものであり、また、再びルネッサンスを興すという壮大な構想を抱いていたパウンドが、イギリスやアメリカといった国の枠組みに囚われぬ姿勢を見せていたことにも通じる。境界を越えて空間的・時間的同一性を志向することは、文学テキストを生み出した現実世界の諸問題を見失うことに繋がる危険性がないわけではないが、一国文学の範疇に収まることになかったパウンドの文学に、いまあらためて注目することは、アメリカ文学を世界文学として見る研究の進展にもつながることだろう。パウンド研究においても、彼の儒教への傾倒や、東アジアへの関心とファシズム関与の関係など、世界文学の視点からあらたに考察しうる問題は多い。環太平洋地域、とりわけ、日本、中国をはじめとする東アジア地域でのパウンド研究と、世界文学としてのアメリカ文学研究の高まりに期待したい。

（名古屋大学）

## 新会長挨拶

この度、会長に就任いたしました宇沢美子（慶応義塾大）です。就任にあたりまして学会員の皆様にご挨拶申し上げます。はじめに、これまで2年にわたり会長職をつとめられ、新型コロナウイルス流行拡大という未曾有の危機的状況のなか、学会をまとめ運営の舵取りにご尽力いただいた高橋裕子前会長、ならびに前常務理事会、各委員会の皆様方、そして中止になりましたが、第54回年次大会開催のご準備を粛々と進めてくださった北海道大学の開催校委員の皆様方に、深く感謝申し上げます。いまだコロナウィルス流行をめぐって事態は収束にいたっておりません。後期の授業形態等についても、各大学で様々な検討がなされていることと存じます。アメリカではまた各地でコロナウィルスのふり返しが警戒され、またBLM運動が抗議する制度的な差別・人権問題が多方面にわたり論議を呼び起こしている真最中です。このような波乱の時期に2年の会長任期を始めることになり不安がないとは申しませんが、佐々木卓也・竹沢泰子両副会長をはじめ新しい常務理事ならびに各委員会委員の方々とともによくよく知恵を出し合い、アメリカ学会の運営とアメリカ研究の振興発展につとめてまいりたいと思います。学会員の皆様方からのご支援ご協力をなにとぞよろしくお願い申し上げます。

少子化・高齢化社会のなか、学会員の人数を減らさない、できれば増やす努力は、健全な学会運営のためにも不可欠かつ急務であります。ぜひ皆様にも、新しい会員の勧誘、推薦をお心がけいただけますとありがたく存じます。人と人との繋がりのおかげを身に染みて実感する日々ですが、遠隔通信会議等を含め、新しいテクノロジーを使った会議や集会の方法も、状況に応じひきつづき使用してまいります。省エネ・省支出をはかりながら、日本各地とアメリカ各地の会員・活動の連絡をよりよくはかり、来年6月に慶応大学にて開催予定の年次大会にも、必要に応じて、遠隔コミュニケーション手段の導入を検討したいと考えます。

わたくしは文学研究者ですが、研究対象のなかに疑似日本人作家のWallace Irwinがおります。彼は日本人学僕（ハウスボーイのようなものです）という設定のハシムラ東郷なる人物になりきり、メジャーな新聞雑誌に破格な英語で書簡コラムを書き一世を風靡しました。ちょうどセオドア・ローズヴェルト大統領の頃です。手紙の最後はきまってHope you are the same!のあやしげな一文で結ばれるのですが、「どうぞおかわりありませんように」はコロナ禍のいまにこそふさわしいご挨拶かもしれません。どうぞおかわりなく過ごされますよう、最後になりましたが、皆様のご健勝をお祈りして、ご挨拶とさせていただきます。

宇沢美子

## 2020-2021 年度役員一覧

### 会長

宇沢 美子（慶応義塾大）

### 副会長

佐々木卓也（立教大）

齋藤眞賞選考委員会委員長兼任

竹沢 泰子（京大）

### 常務理事

佐久間みかよ（学習院女子大）

会務委員会会務担当

佐々木一恵（法政大）

会務委員会会務担当

西山 隆行（成蹊大）

会務委員会財務担当

清水さゆり（ライス大）

年次大会企画担当

兼子 歩（明治大）

年次大会企画担当

麻生 享志（早稲田大）

年次大会企画担当

本合 陽（東京女子大）

年報編集委員会

小田 悠生（中央大）

国際委員会

橋川 健竜（東京大）

英文ジャーナル編集委員会

佐藤真千子（静岡県立大）

広報・電子化情報委員会

大串 尚代（慶応義塾大）

清水博賞選考委員会

前嶋 和弘（上智大）

中原伸之賞選考委員会

### 理事（選挙選出）

井口 治夫（関西学院大）

石原 剛（東京大）

石山 徳子（明治大）

伊藤 裕子（亜細亜大）

遠藤 泰生（東京大）

大串 尚代（慶応義塾大）

大津留（北川）智恵子（関西大）

岡山 裕（慶応義塾大）

奥田 暁代（慶応義塾大）

越智 博美（専修大）

兼子 歩（明治大）

川口 悠子（法政大）

川島 浩平 (早稲田大)  
清水さゆり (ライス大)  
土屋 和代 (東京大)  
中野耕太郎 (大阪大)  
肥後本芳男 (同志社大)  
松原 宏之 (立教大)  
山岸 敬和 (南山大)

貴堂 嘉之 (一橋大)  
杉山 直子 (日本女子大)  
土屋 由香 (京都大)  
西崎 文子 (同志社大)  
廣部 泉 (明治大)  
宮田伊知郎 (埼玉大)  
和田 光弘 (名古屋大)

佐久間みかよ (学習院女子大)  
舌津 智之 (立教大)  
中野 勝郎 (法政大)  
新田 啓子 (立教大)  
前嶋 和弘 (上智大)  
矢口 祐人 (東京大)  
渡辺 靖 (慶応義塾大)

#### 理事 (会長推薦)

麻生 享志 (早稲田大)  
佐々木一恵 (法政大)  
西山 隆行 (成蹊大)  
渡辺 将人 (北海道大)

小田 悠生 (中央大)  
佐藤真千子 (静岡県立大)  
橋川 健竜 (東京大)

佐々木卓也 (立教大)  
竹沢 泰子 (京都大)  
本合 陽 (東京女子大)

#### 監事

小檜山ルイ (東京女子大)

増井志津代 (上智大)

森本あんり (国際基督教大)

## 第 55 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

アメリカ学会第 55 回年次大会は、2021 年 6 月 5 日(土)・6 日(日)に慶応義塾大学にて開催の予定です。大会での自由論題報告と部会企画提案を、下記の通り募集します。55 回大会はオンライン開催の可能性がります。詳しくは今後ホームページで発表します。

会員のみならずからの積極的な応募をお待ちしております。すべての応募は年次大会企画委員会 (program@jaas.gr.jp) 宛に、1~3 のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

### 1. 「自由論題報告申し込み」(締切日: 11 月 20 日)

報告タイトル, 1,500 字程度の要旨, およびキーワード 5 つを記載。

自由論題での報告は、海外在住の場合(下を参照)を除き、会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められた時点で正式に審査対象とします。  
(海外在住の非会員) 海外在住の方(国籍を問わない)は、非会員のままで自由論題での発表が可能です。ただし、報告が決定した場合は、2021 年 3 月 1 日までに大会参加費 8,000 円の支払いが必要となります。大会参加費は返金不可となっておりますのでご了承ください。報告申し込み、参加費支払いのいずれも、締め切りは日本標準時です。

報告内容は未発表のものとし、要旨に基づいて審査の上、報告の可否を通知いたします。報告者には 2021 年 5 月 15 日までにペーパー(和文の場合、8000 字~12,000 字、英文の場合、5,000~7,500 words 程度)を提出していただき、学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し、年次大会の前後 2 週間のみペーパーを掲載します。また、英語での報告の場合は、要旨・タイトルは英語としてください。なお、2020 年 6 月における第 54 回大会の取りやめ(延期)によって発表できなかった方は、今後発行予定のプロシーディングスに掲載を希望されない場合、第 55 回に同じ報告を申し込みできます。詳細は今後改めて発表いたします。

自由論題の発表者について、パネル形式の応募も認めております。詳細は年次大会企画委員会にお問い合わせください。

### 2. 「部会の企画提案」(締切日: 9 月 6 日)

部会のテーマおよび 800 字程度の要旨。報告者案があれば合わせてご提案ください。部会の企画に関しては、以下の申し合わせ事項にご留意ください。第 53・54 回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第 55 回大会の部会では報告できません。司会者、討論者としての応募も原則として避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため、原則学会員としてください。非会員の部会登壇者に対して、学会から謝金・交通費などは支払われませんので、ご了承ください。また、登壇者の構成については、ジェンダーや地域の多様性にできるだけ配慮して下さい。学際性のある企画を歓迎しますが、必ずしもそれを条件とはいたしません。若手会員の積極的な応募を歓迎いたします。

### 3. 「分科会開催申し込み」(締切日: 8 月 31 日)

新規の場合は、分科会趣旨(400 字以内)と、連絡責任者および賛同者 5 名の氏名をお知らせ下さい。継続の場合にも、分科会責任者の氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会でを行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを、あらかじめご理解ください。

年次大会企画委員会

## アメリカ学会 2019 年度事業報告

### 1. 会員数

学会運営の適正化と経費節減のため、内規第 I 条 3 項「年会費を 3 年間滞納すると退会処分となる」に照らして 18 名を除名した。それに伴い 2020 年 3 月 31 日現在の会員数は 1,077 名（一般会員 928 名、院生会員 114 名、海外会員 13 名、名誉会員 7 名、維持会員 15 社）となり若干減少した。異動内訳は以下の通り。〔前年度末 1,100 名\*〕

新入会員 18 名（一般 7 名、院生 8 名、海外 2 名、維持 1 社）

退会者 41 名（除名 18 名、逝去 4 名、希望退会 19 名）

\* 2018 年度総会および理事・評議員会で報告した、2018 年度末の会員数は 1103 名であったが、その後事務局の手違いで 2019 年 4 月入会者 3 名（院生会員 2 名および維持会員 1 社）が含まれていたことが判明したため、この数字になっている。それに伴い、2018 年度末の会員数は 1,100 名（一般 959 名、院生 107 名、名誉 7 名、海外 13 名、維持 15 社）、2017 年度末の会員総数は 1,117 名となる。

### 2. 理事・監事の改選

2020 年 2 月 3 日を締め切りとして理事・監事選挙を実施し、板津木綿子・佐々木一恵両会員の立ち会いのもと、2 月 22 日に開票した。投票返信数は 115 通で、集計の結果、理事については上位 33 名を選出し、監事についても得票順に 3 名を選出した。

### 3. 2020 年度年次大会の開催見送りについて

2020 年度年次大会は、6 月 13 日および 14 日に北海道大学において開催の予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて 2020 年 3 月 20 日に開催された臨時常務理事会において、北海道大学での開催を見送り、事態の推移をみながら後日縮小しての開催を模索することとなった。

### 4. 2021 年度年次大会の開催校について

2021 年度年次大会については、慶応義塾大学での開催に向けて関係者の内諾をいただいている。今後、新型コロナウイルスの感染の広がりや、それに伴う開催校の施設利用の可能性を考慮しながら開催準備を進める予定である。

### 5. 会務委員会

学会運営と財政の適正化を図るため、会員の動静把握と会費納入の促進に尽力した。また、理事・監事選挙を行った。

### 6. 年次大会企画委員会

#### (1) 第 53 回年次大会の開催

前年に引き続いて佐久間みかよ会員を企画委員長として、2019 年 6 月 1～2 日に法政大学において第 53 回年次大会が開催された。1 日にはシンポジウムおよび Ki Yoon Jang 氏 (ASAK) を招いたラウンドテーブルを開催し、2 日には例年通り自由論題報告・部会・分科会および ASA と OAH の派遣研究者を招いたワークショップを開催した。若手旅費助成については、応募者がなかったため支出しなかった。

#### (2) 第 54 回年次大会について

2019 年 6 月より兼子歩会員が企画委員長となり、2020 年 6 月 13～14 日に北海道大学にて年次大会を開催すべくプログラムの準備を進めていたが、新型コロナウイルスの感染拡大への対応として、6 月開催を取りやめることになった。実施されなかった大会プログラム案は、2020 年 4 月発行の会報第 202 号に掲載された。

今後、状況の推移を見守り、規模を縮小させた上での後日開催を含め、代替的な措置の可能性を検討する。

### 7. 年報編集委員会

#### (1) 2019 年度は、年報『アメリカ研究』第 54 号（特集テーマは、「メディアと情報」）を刊行した。

#### (2) 『アメリカ学会会報』は、例年と同様、3 号（第 199 号、第 200 号、第 201 号）を発行した。

### 8. 英文ジャーナル編集委員会

英文ジャーナル *The Japanese Journal of American Studies* 第 30 号を 2019 年 7 月に刊行した。

### 9. 清水博賞選考委員会

第 25 回アメリカ学会清水博賞を 2 名に授与した。

### 10. 斎藤眞賞選考委員会

第 6 回アメリカ学会斎藤眞賞を 1 名に授与した。



11. 中原伸之賞選考委員会  
第1回アメリカ学会中原伸之賞を2名に授与した。
12. 広報・電子化情報委員会  
学会ウェブサイトの管理と更新ならびにメーリングリストの管理に加え、各種広報戦略業務について協議を進めた。また、ワークショップを開催するなどしてウェブページ更新の円滑化に努めている。
13. 国際委員会
- (1) 2019年度行事について
- ① 2019年度JAAS年次大会にてワークショップA/B“Walled Worlds: Sovereignty, Nationalism and Globalization”を開催した。
  - ② ASAとの共同プロジェクトとして中央大学と同志社大学でプロセミナーを開催した。
  - ③ OAH短期滞在プログラムを東北大学と成城大学で実施した。
  - ④ 2019年度JAAS年次大会には、ASAKからKi Yoon Jang氏およびJungman Park氏が参加。2019年9月20～21日に高麗大学（ソウル）にて開催されたASAK年次大会に佐久間みかよ会員および菅美弥会員が派遣された。
- (2) アメリカ学会海外渡航奨励金  
2019年度前期1名、後期1名に給付が決定したが、後期の1名については新型コロナウイルス感染拡大により参加予定であった学会が中止となり、給付もキャンセルされた。
- (3) 2019年度ASA年次大会委員派遣、日米友好基金の大学院生補助給付  
2019年11月7日～10日にホノルルで開催されたASA年次大会に国際委員2名を派遣、日米友好基金による年次大会参加費用補助金を計3名に給付した。
- (4) 2019年度ASA年次大会ASA-JAAS共催パネルとアメリカ研究振興会による助成  
2019年11月7日～10日にホノルルで開催されたASA年次大会で2つのASA-JAAS共催パネルに計6名の会員が参加し、アメリカ研究振興会からの助成を受けた。
- (5) 日米友好基金給付金によるASA研究者の2020年度JAAS年次大会招聘者決定  
2020年度招聘研究者をMartin F. Manalansan氏（University of Minnesota, Twin Cities）およびShelly Streeby氏（University of California, San Diego）に決定したが、新型コロナウイルス感染拡大により来日が困難であるため次年度に持ち越す方向で調整中。
- (6) 日米友好基金給付金による2020年度OAH研究者短期滞在プログラムのゲスト研究者決定  
弘前大学にErik Loomis氏（University of Rhode Island）、明治学院大学にFarina Noelani King氏（Northeastern State University）が決定したが、新型コロナウイルス感染拡大により来日が困難であるため次年度に持ち越す方向で調整中。
- (7) 2020年度OAH年次大会関係  
2020年4月2日～5日にワシントンDCで開催予定であったOAH年次大会は新型コロナウイルス感染拡大により中止となり、ビジネス・ミーティングのみオンラインで実施した。日米友好基金による年次大会参加補助金を給付される予定だった大学院生2名は、次年度の大会に参加する場合に補助金を受ける方向で調整中。
- (8) ASAK研究者の2020年度JAAS年次大会招聘  
2020年度JAAS年次大会には、ASAK会長Jae H. Roe氏（Sogang University）を招聘する予定であったが、大会見送りにより今後のことについては未定。なおASAK年次大会は隔年開催となり2020年度は不開催年である。
- (9) 2021年OAH研究者短期滞在プログラムのホスト校決定  
愛知県立大学（担当：久田由佳子会員）、東洋学園大学（担当：加藤恵理会員）に決定したが、新型コロナウイルス感染拡大により2020年度のプログラムが2021年度に繰り越される予定であることから、両校には2022年度のホスト校をお願いする方向で検討中。
- (10) 2020年度JAAS年次大会ワークショップA/Bの決定  
2020年度JAAS年次大会で開催される予定であったワークショップA/B（Queer Futurities: Utopias, Dystopias and Disruptive Transnationalism I/II）は、年次大会見送りによって中止となり、2021年度大会で改めて開催する方向で検討中。
- (11) 2020年度プロセミナー開催  
ASA招聘研究者の来日中止により、立教大学と立命館大学で開催予定であったプロセミナーも中止となった。来年度、同じホスト校で開催するかどうかは今後検討する。

~~~~~

### 会員登録情報更新のお願い

会員各位におかれましては、御所属や御住所、メールアドレスなどの異動がありましたら、速やかに学会事務局（office@jaas.gr.jp）までお知らせくださいますようお願いいたします。とくに本年は、新しい名簿の発行を予定しておりますので、編集作業を最小限にし、記載内容をより正確にするためにも、よろしくご協力をお願い申し上げます。

会務委員会

## 2019 年度決算及び 2020 年度予算

総会において 2019 年度決算及び 2020 年度予算についてご承認をいただきました。ここに収支報告および予算案を掲載し、会員各位へのご報告とさせていただきます。なお、2019 年度の収支報告は、出納帳その他の関連書

類とあわせて、遠藤泰生、大津留（北川）智恵子各監事の監査を受け、適切と認める旨の監査報告書が提出されていることをご報告いたします。（財務担当 西山隆行）

### アメリカ学会 2019 年度 収支報告

| □収入の部            |            | (単位：円)     |  |
|------------------|------------|------------|--|
| 科 目              | 2019 年度予算  | 2019 年度決算  |  |
| 1. 年会費           | 9,000,000  | 8,301,000  |  |
| 2. 雑収入(雑誌売上, 利息) | 400,000    | 545,840    |  |
| 3. 広告収入          | 30,000     | 60,000     |  |
| 4. 寄付金           | 0          | 1,000,000  |  |
| 5. アメリカ研究振興会助成金  | 1,000,000  | 1,000,000  |  |
| 6. 日米友好基金(OAH)   | 1,982,751  | 2,527,730  |  |
| 7. 日米友好基金(ASA)   | 430,000    | 108,460    |  |
| 小 計              | 12,842,751 | 13,543,030 |  |
| 8. 前期繰越金         | 17,335,140 | 17,335,140 |  |
| 合 計              | 30,177,891 | 30,878,170 |  |

#### □支出の部

| 科 目               | 2019 年度予算  | 2019 年度決算  |  |
|-------------------|------------|------------|--|
| 1. 会計費            | 4,382,056  | 3,569,280  |  |
| (01) 事務局人件費       | 600,000    | 530,379    |  |
| (02) 業務委託費        | 2,102,056  | 1,972,040  |  |
| (03) 常務理事会費       | 300,000    | 330,000    |  |
| (04) 会費郵送通信費      | 130,000    | 54,647     |  |
| (05) 事務用品費        | 100,000    | 37,666     |  |
| (06) 広報・電子化情報委員会費 | 500,000    | 133,528    |  |
| (07) 将来構想委員会費     | 0          | 0          |  |
| (08) 名簿作成費        | 0          | 0          |  |
| (09) 選挙関連費        | 400,000    | 336,992    |  |
| (10) 口座振替・郵便振替手数料 | 150,000    | 26,876     |  |
| (11) 会務雑費         | 100,000    | 147,152    |  |
| 2. 研究事業費          | 10,910,000 | 8,501,631  |  |
| (01) 年次大会費        | 950,000    | 835,392    |  |
| (1) 準備費           | 300,000    | 0          |  |
| (2) 大会費           | 200,000    | 806,392    |  |
| (3) 企画委員会費        | 300,000    | 29,000     |  |
| (4) 非定職者旅費補助      | 150,000    | 0          |  |
| (02) 国際交流費        | 3,760,000  | 4,136,350  |  |
| (1) 国際交流活動費       | 500,000    | 216,350    |  |
| (2) OAH 短期滞在      | 1,700,000  | 1,910,000  |  |
| (3) ASA 年次大会派遣    | 600,000    | 1,500,000  |  |
| (4) ASAK 年次大会派遣   | 160,000    | 160,000    |  |
| (5) OAH 年次大会派遣    | 300,000    | 0          |  |
| (6) 海外渡航奨励金       | 500,000    | 350,000    |  |
| (03) 年報刊行費        | 3,200,000  | 1,899,490  |  |
| (1) 年報編集委員会費      | 0          | 603,861    |  |
| (2) 年報印刷費         | 0          | 924,619    |  |
| (3) 年報郵送通信費・雑費    | 0          | 371,010    |  |
| (04) 英文ジャーナル刊行費   | 1,700,000  | 936,418    |  |
| (1) 英文編集委員会費      | 0          | 0          |  |
| (2) 英文印刷費         | 0          | 502,335    |  |
| (3) 英文郵送通信費・雑費    | 0          | 131,083    |  |
| (4) コピーエディター雑費    | 0          | 303,000    |  |
| (05) 会報刊行費        | 950,000    | 421,350    |  |
| (1) 会報印刷費         | 0          | 163,064    |  |
| (2) 会報郵送通信費       | 0          | 258,286    |  |
| (3) 会報雑費          | 0          | 0          |  |
| (06) 清水博賞委員会費     | 300,000    | 182,823    |  |
| (07) 斎藤眞賞委員会費     | 50,000     | 0          |  |
| (08) 中原伸之賞委員会費    | 0          | 89,808     |  |
| (09) 研究教育支援費      | 0          | 0          |  |
| (10) 研究事業予備費      | 0          | 0          |  |
| 小 計               | 15,292,056 | 12,070,911 |  |
| 3. 次期繰越金          | 14,885,835 | 18,807,259 |  |
| 合 計               | 30,177,891 | 30,878,170 |  |

### アメリカ学会 2020 年度 予算案

| □収入の部            |  | (単位：円)     |
|------------------|--|------------|
| 科 目              |  |            |
| 1. 年会費           |  | 9,000,000  |
| 2. 雑収入(雑誌売上, 利息) |  | 400,000    |
| 3. 広告収入          |  | 30,000     |
| 4. 寄付金           |  | 0          |
| 5. アメリカ研究振興会助成金  |  | 1,000,000  |
| 6. 日米友好基金(OAH)   |  | 2,000,000  |
| 7. 日米友好基金(ASA)   |  | 730,000    |
| 小 計              |  | 13,160,000 |
| 8. 前期繰越金         |  | 18,807,259 |
| 合 計              |  | 31,967,259 |

#### □支出の部

| 科 目               |  |            |
|-------------------|--|------------|
| 1. 会計費            |  | 3,982,056  |
| (01) 事務局人件費       |  | 600,000    |
| (02) 業務委託費        |  | 2,102,056  |
| (03) 常務理事会費       |  | 300,000    |
| (04) 会費郵送通信費      |  | 130,000    |
| (05) 事務用品費        |  | 100,000    |
| (06) 広報・電子化情報委員会費 |  | 500,000    |
| (07) 名簿作成費        |  | 0          |
| (08) 選挙関連費        |  | 0          |
| (09) 口座振替・郵便振替手数料 |  | 150,000    |
| (10) 会務雑費         |  | 100,000    |
| 2. 研究事業費          |  | 11,380,000 |
| (01) 年次大会費        |  | 950,000    |
| (1) 大会費           |  | 500,000    |
| (2) 企画委員会費        |  | 300,000    |
| (3) 非定職者旅費補助      |  | 150,000    |
| (02) 国際交流費        |  | 3,680,000  |
| (1) 国際交流活動費       |  | 500,000    |
| (2) OAH 短期滞在      |  | 1,700,000  |
| (3) ASA 年次大会派遣    |  | 600,000    |
| (4) ASAK 年次大会招聘   |  | 80,000     |
| (5) OAH 年次大会派遣    |  | 300,000    |
| (6) 海外渡航奨励金       |  | 500,000    |
| (03) 年報刊行費        |  | 3,200,000  |
| (1) 年報編集委員会費      |  |            |
| (2) 年報印刷費         |  |            |
| (3) 年報郵送通信費・雑費    |  |            |
| (04) 英文ジャーナル刊行費   |  | 1,700,000  |
| (1) 英文編集委員会費      |  |            |
| (2) 英文印刷費         |  |            |
| (3) 英文郵送通信費・雑費    |  |            |
| (4) コピーエディター雑費    |  |            |
| (05) 会報刊行費        |  | 950,000    |
| (1) 会報印刷費         |  |            |
| (2) 会報郵送通信費       |  |            |
| (3) 会報雑費          |  |            |
| (06) 清水博賞委員会費     |  | 300,000    |
| (07) 斎藤眞賞委員会費     |  | 50,000     |
| (08) 中原伸之賞委員会費    |  | 300,000    |
| (09) 研究教育支援費      |  | 150,000    |
| (10) 研究事業予備費      |  | 100,000    |
| 小 計               |  | 15,362,056 |
| 3. 次期繰越金          |  | 16,605,203 |
| 合 計               |  | 31,967,259 |

藤岡真樹 著

## 『アメリカの大学におけるソ連研究の編制過程』

(法律文化社, 2017年, 4,400円)

本書は第二次世界大戦期から1950年代前半にかけて展開した、アメリカ合衆国の大学におけるソ連研究の編制過程を実証的に論じた意欲作である。この時代、アメリカで地域研究が勃興したことは広く知られているが、冷戦を戦うことになるソ連の研究は、資金を提供する連邦政府や大財団と大学との間にしばしば緊張関係を強いるものであった。それ故、従来の先行研究は大学がそうした権力にいわば「買収」された側面を糾弾してきた。だが、近年は逆に大学人のしたたかさを指摘する研究が主流になっている。そうしたなかで著者はいわば「第三の道」、つまり、大学の権力への歩み寄りを批判するのでもなく、逆に「学問の府」としての大学を称揚するのでもない方向性を見出している。

またその際、オリヴィエ・ザンズが提示した「機関連環」概念を援用しつつ、周到な考察を行っている。ザンズによれば「機関連環」は大学、連邦政府、企業の研究、財団、軍部等により構成され、連環内の人材の流動性が高く、それ故、社会に還元される実用的な学知が創出され、ひいては「アメリカの世紀」を生み出した。著者はこの「機関連環」概念を一定程度評価しつつ、さらに踏み込んで、「学問の自由」の理念、反共ヒステリア、あるいは元来、工科大学であるMITの人文・社会科学分野への進出、またその際の学内政治といった要素を組み入れることで、事態はさらに複雑であったことを論証している。

具体的には、問題の所在と先行研究の検討を踏まえた上で(序章)、第二次世界大戦中の戦略情報局(OSS)ソ連研究部門の誕生の経緯から書き起こし(第1章)、まずロックフェラー財団の助成を得たコロンビア大学ロシア研究所の設立(1946年9月)、カーネギー財団の助成を得たハーヴァード大学ロシア研究センターの設立(1948年2月)、また、近隣のマサチューセッツ工科大学(MIT)が国務省から委託された「トロイ計画」への関与を通じた、ロシア研究所の再編が論じられる(第2章)。さらに空軍から委託された「難民間き取り計画」の遂行を通じて、逆説的ながらロシア研究センターが政府から離間していくさまが描かれる(第3章)。そして、フォード財団の助成を得て、当初、ソ連研究を中心に据えた機関として構想されたMIT国際問題研究センター(1952年2月設立)が、1960年代にかけて近代化論の牙城となっていく道筋が示されている(第4章)。最後に1950年代以降のソ連研究の衰退と再生が、上記の複眼的考察に基づき検証されている(終章)。

著者が描く権力と大学との関係の推移とその帰結は決して単線的ではなく、涉猟した連邦政府、財団、大学の一次史料に基づく考察も示唆に富んでいる。冷戦と大学との関係、ひいては「学問の自由とは何か」に興味を持つ読者に強く勧めたい。

中嶋啓雄(大阪大学)

小澤智子 編

## Japaneseness across the Pacific and Beyond

(彩流社, 2019年, 4,950円)

本書は、太平洋世界で構築／再構築される「ジャパニズネス」について、気鋭の日系移民研究者9名が論考を寄せている本である。日本で出版され、「ジャパニズネスは太平洋を越える／超える」という邦文タイトルがついているが、すべて英語で書かれている。

まず主題の「ジャパニズネス」について、本書は次のように説明している。ジャパニズネスとは、日本人であることや日本とのつながりについて、その意味や定義めぐる議論である。ホワイトネスをめぐる議論がそうであるように、ジャパニズネスも時代とともに再解釈されるものであり、誰がジャパニズネスを構成するのかは時代や状況によって異なる。

それではジャパニズネスがどう構築されたのか。本書は、三つの視角を提示している。第一に、ジャパニズネスが「ジャパニズネス」として台頭していくプロセスである。Eiichiro AzumaとTomoko Ozawa, Hisami Hasegawaが、日系移民の教育や日米を跨いで活躍した個人に注目し、彼／彼女の教育や活動を通してジャパニズネスが北米のみならず、日本の帝国主義とも連続しながら実体化していくプロセスを描き出している。第二に、ジャパニズネスがナショナル化していくプロセスである。日系アメリカをめぐるカテゴリーや言説がナショナルやグローバルな次元でどう台頭していったのか、Miya Shichinohe-SugaとYuko Itatsuが緻密な調査と分析をもとにそのプロセスを解明している。第三に、ジャパニズネスが経験・表象されていくプロセスである。Michiyo KitawakiとNorifumi Kawahara, Yuukichi Niwayamaが、北米の日系移民にとってジャパニズネスとは何か、ニッケイネスとどう異なるのか、そのリアリティを見事に描き出している。

グローバル・ヒストリーやトランスパシフィック・スタディーズの台頭とともに、既存の地域研究の枠組みを超え、新たな地域横断的枠組みを提示する優れた研究が日系移民研究の中から多く発表されている。本書もこのような試みの一つとして位置づけることができよう。しかし本書の意義は、さらに「ジャパニズネス」とは何か、それについての再考を促している点にある。誰が、どのようにジャパニズネスを構成してきたのか。そしてそれが地域や時代によってどう異なったのか。日系移民となった当事者の人びとは、ジャパニズネスについての議論を多く重ねてきたであろう。一方でこれに注目してきた研究は、移民を理解するための材料としてこれを理解することが多かった。しかし本書が注目するジャパニズネスは、日系移民のみならず、日本や北米に住む人たちの生活や文化も、太平洋に君臨した帝国主義や植民地主義の歴史と連続する中で発展してきたことを描き出すものであり、ジャパニズネスを考えることは、日系移民を含めた太平洋に生きる人びとを理解することだと教えてくれる。人種エスニシティ研究や移民研究のみならず、地域や学問分野を横断的に研究しようとする者にとって、必読の一冊となろう。

李里花(中央大学)



倉橋洋子・高尾直知・竹野富美子・城戸光世 編  
『繋がり詩学——近代アメリカの知的独立と  
〈知のコミュニティ〉の形成』  
(彩流社, 2019年, 4,620円)

本書は、植民地期から19世紀末までの多様な「知のコミュニティ」に焦点を当て、合衆国の知的独立と国家形成の過程を鮮やかに活写した極めて野心的な論集である。16編の論考から為る本書を以下に簡単な紹介する。

18世紀末までを扱う第1部「共和国」では(以下敬称略)、白川恵子が、植民地期のニューヨークで起きた奴隷反乱陰謀事件をもとに共同体的無意識の問題に取り組み、竹腰佳誉子は、アメリカ哲学協会の存在が国家の知的独立に寄与した過程を明らかにする。辻祥子は、フレンドリー・クラブがブロックデン・ブラウンに与えた影響を『オーモンド』から読み解く。

アメリカ独自の思想が育まれた19世紀中葉までを論じる第2部は、超絶主義とニューイングランド地方の作家を扱う。まず、成田雅彦がエマソンの「自然」観を環大西洋の知のコミュニティという文脈から再考し、竹野富美子は、ソロー作品におけるボストン博物学協会の影響を明らかにする。倉橋洋子は、ホーソンとサタデー・クラブとの対立をめぐり、政治と文学の問題に切り込む。稲富百合子は、ロングフェローのコスモポリタニズムが当時の文化人に与えた影響を考察する。

第3部「女性」は、女性が主体的に形成した知のコミュニティに焦点を当てる。古屋耕平は、マーガレット・フラワー自身が翻訳した『ゲーテとの対話』をもとに翻訳作業がもたらす影響を検討し、高尾直知は、超絶主義クラブの集会である〈会話〉を通してフラワーの実践を想像的に浮かび上がらせる。城戸光世は、ブルック・ファームに参加した女性たちの思想と活躍に光を当てる。

メルヴィルをめぐる第4部では、橋本安史が、「ホーソンと彼の若」をもとに、作家自身とホーソン、シェイクスピアによる文学共同体を再検討し、林姿徳が、ヤング・アメリカ運動と当時の出版界の問題を扱う。竹内勝徳は、労働者階級と知識人との対立を象徴する事件アスター・プレイス暴動に、政治性のみならず、それが作家に与えた文化作用を『信用詐欺師』において論じる。

南北戦争以降を検討した第5部「拮据りゆくコミュニティ」では、本岡亜沙子が、南北戦争後期に流行したスクラブブックに着目し、ルイーザ・メイ・オルコットの作品への影響を読み取る。中村善雄は、『アトランティック・マンズリー』誌が当時の社会・文化的状況を反映しながら編集者の指針によって変遷していく様を読者受容の問題とも絡めて考察する。そして、貞廣真紀は、世紀末のイギリス社会主義者たちのアメリカ作家受容を検討し、環大西洋批評空間におけるホイットマン、メルヴィル、ソローの独特な受容を紐解いてみせる。

本書の各論考が明確に示すとおり、合衆国における知的活動が国民国家の形成に寄与した過程とは、むしろ、大西洋を挟んだ両大陸の相互コミュニケーションのダイナミズムによって駆動されていた事実である。さらにそこでは、男性知識人のみならず、女性たちの活躍もまた多大な貢献を果たしていたことを、本書はスリリングに解き明かしてくれる。

小椋道晃(立教大学)

山辺省太 著  
『フラナリー・オコナーの受動性と暴力  
——文学と神学の狭間で』  
(彩流社, 2019年, 3,300円)

フラナリー・オコナーは、他の南部(とりわけ女性)作家と比べると日本人読者にとって親しみのある文学者といえるだろう。その著書の大半は文庫で翻訳が手に入るし、大江健三郎の作品内にもしばしばオコナーへの言及がみられる。その一方で、本書の著者山辺省太氏が「あとかき」で述べているように、作品の展開する「精神性の欠如した茫漠とした世界」に「何とも言えない奇妙な感覚」を抱く読者が多いのも容易に想像できる。その感覚が本書を書く原動力となったと著者はいうが、まさにオコナー文学の奇妙さ・それが抱える矛盾と思われるものに正面から向き合ったのが本書である。

序章「文学と神学の狭間で」において著者が述べるように、オコナー文学に共通して見られる特徴はカソリック作家である「彼女が求めて止まなかった神の恩寵とその到来を喚起する暴力的な現実世界との乖離」であり、彼女を解釈する者が直面せざるを得ないのは「オコナーは宗教を描こうとしたのか、それとも文学に身を捧げていたのか」という問いである。それに対する著者の答えはこうだ——「オコナーは超越的な世界への必要不可欠な道標として、現実世界を描いた作家である」。つまり、オコナーの作品において神の啓示が表出するのは、彼女が形而下の世界を描いたためであり、そこで起こるすべての事象は神性が発動する契機となるという。そうした世界において登場人物たちは能動的に何かを見るのではなく「何かを見るよう仕向けられる」瞬間、すなわち「受動的瞬間」に神の啓示を体験するのだ。著者はこれまでのオコナー批評が対象としてこなかった「受動性」を手掛かりとしてオコナー文学に潜む倫理に迫る。

本書は序章、第I部「秘儀における物質と知覚」、第II部「受動性という倫理——他者の欲待と神の恩寵」、第III部「オコナーの終末的光景——想像力、時間、現実性」、第IV部「共同体／国家における政治と宗教」、「あとかき」からなり、「善人はなかなかいない」のようなメジャーな作品からマイナーなものまで幅広く扱う。各部分は2・3章からなり、それぞれの章がオコナー作品において一見矛盾するように思われる事象や概念——神と物質(第2章)、善と暴力(第3章)、黒さと神の恩寵(第5章)、南部の農園とキリストの共同体(第8章)など——に向き合い、その「矛盾」を解消していく。軸はあくまで作品の精読におきながらも、キリスト教文学批評をはじめエマニュエル・レヴィナスやジャック・デリダらの思想、伝記的事実、作品の背景となる南部に関する批評まで柔軟かつ巧みに織り交ぜながら、オコナーはなぜ神の啓示を経験するために文学を通過する必要があったのかを見事に論じる。

オコナーに興味をもつ学生や研究者にとって必読の書であるだけでなく、キリスト教文学研究や、これまでオコナー文学の倫理を他の南部文学との対比を踏まえて十分説得的に論じてきたとはいえない南部研究にも貢献する一冊だ。

遠藤郁子(法政大学)



## アメリカ学会清水博賞第 25 回受賞作品と第 26 回公募のお知らせ

「アメリカ学会清水博賞」は、故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、1996年に設けられました。同賞は、若手会員による最初の単著として刊行された著書のなかから特に優れた作品に授与されるものです。

選考委員会は、第 25 回清水博賞候補作として、2019 年 1 月 1 日から 12 月 31 日の期間に出版された著作のなかから、自薦・他薦で 4 点の応募を受理しました。その後、厳正な審査の結果、以下の二作品に清水博賞を授与することが決定いたしました。外部査読者として当委員会の審査にご協力をいただいた会員の皆様に、厚くお礼申し上げます。

### 第 25 回受賞作品：

Yoshiaki Furui, *Modernizing Solitude: The Networked Individual in Nineteenth-Century American Literature* (University of Alabama Press, 2019)

Ai Hisano, *Visualizing Taste: How Business Changed the Look of What You Eat* (Harvard University Press, 2019)

次回の審査に向けて会員諸氏のご協力をお願いいたします。当該期間（2020 年 1 月 1 日から 12 月 31 日）に出版された著書について、会員諸氏からの積極的な推薦（自薦・他薦）をお願いいたします。推薦にあたっては、2021 年 1 月 8 日（金）までに件名「第 26 回清水博賞候補推薦」にて清水博賞選考委員会（shimizu@jaas.gr.jp）宛にお知らせください。  
清水博賞選考委員会

---

## アメリカ学会斎藤眞賞第 6 回受賞作品について

「アメリカ学会斎藤眞賞」は、故斎藤眞会員のご遺族からの寄付金を基金として、2009 年度から設けられました。同賞は授賞を隔年とし、その直近 2 年間の『アメリカ研究』および *The Japanese Journal of American Studies*（英文ジャーナル）に掲載された論文のなかから、若手による優秀な作品に、賞金 3 万円と賞状を贈るものです。

第 6 回アメリカ学会斎藤眞賞は、『アメリカ研究』52, 53 号、*The Japanese Journal of American Studies* 29, 30 に掲載された 25 本の論文を審査対象とし、二段階にわたる厳正な審査の結果、次の作品が受賞されました。

### 第 6 回受賞作品：

Michio Arimitsu (有光道生), “De-Occidentalized ‘Projections in the Haiku Manner’: Poetics of Indeterminacy and Transcultural Reconfiguration of ‘Frog Perspectives’ in Richard Wright’s Last Poems,” *The Japanese Journal of American Studies* 29 (2018).

斎藤眞賞選考委員会

---

## アメリカ学会中原伸之賞第 1 回受賞作品と第 2 回公募のお知らせ

アメリカ学会では、2019 年度から公益財団法人アメリカ研究振興会理事長の中原伸之氏からの個人寄付金を基金とし、「アメリカ学会中原伸之賞」を設けています。この賞は、本学会員の第二作以降の単著（年齢制限なし）ないしは本学会員の最初の単著（この場合のみ出版時 50 歳以上であること）のなかから、日本、アメリカ、あるいは世界のアメリカ研究の水準を高めることに貢献できる、深い知見と新しい視座を提供する特に優れた研究書に、賞状と賞金 5 万円を贈るものです。

第 1 回アメリカ学会中原伸之賞は、2019 年 1 月 1 日から 12 月 31 日の期間に出版された著作のなかから、自薦・他薦で寄せられた作品を厳正に審査した結果、次の二作品が本年度受賞作となりました。

### 第 1 回受賞作品：

Hiroshi Okayama, *Judicializing the Administrative State: The Rise of the Independent Regulatory Commissions in the United States, 1883–1937* (Routledge, 2019)

小檜山ルイ『帝国の福音——ルーシー・ビーボディとアメリカの海外伝道』（東京大学出版会、2019）

なお上記の作品とともに次の作品も最終候補に残りました。

### 最終候補作品：

油井大三郎『平和を我らに——越境するベトナム反戦の声』（岩波書店、2019）

Mari Yoshihara, *Dearest Lenny: Letters from Japan and the Making of the World Maestro* (Oxford University Press, 2019)

査読にご協力いただきました 11 名の会員・非会員の皆様に感謝申し上げます。

また第2回中原伸之賞選考委員会は、2020年1月1日～12月31日の間に出版された作品について、会員のみなさんからの積極的な推薦（自薦・他薦）を受け付けます。

推薦する場合には、件名を「第2回中原伸之賞候補推薦」として、2021年1月8日（金）までに、400字程度の推薦理由（書式自由）を中原伸之賞選考委員会（nakahara\_prize@jaas.gr.jp）宛にメールでご応募ください。

自薦の場合は3冊のご献本を学会事務局に郵送でお願い申し上げます（他薦の場合にも可能ならご献本をお願い申し上げます）。学会事務局は次の通りです。

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8日栄ビル703A あゆみコーポレーション内アメリカ学会「中原賞選考委員会」  
中原伸之賞選考委員会

## 英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

### 〈英文書誌投稿についてのお知らせ〉

2019年1月～12月に出版された英語著作、英語論文（博士論文を含む）に関する情報を、学会ホームページ <http://www.jaas.gr.jp/2014/09/post-225.html> で示されている形式に従ってご記入のうえ、電子メール本文に貼りつけて、9月20日までに学会英文ジャーナル編集委員会宛（[engjournal@jaas.gr.jp](mailto:engjournal@jaas.gr.jp)）にお送りください。指示された形式にしたがって原稿を作成していただきますよう、お願いいたします。なお、英文ジャーナル掲載の論文については、この英文書誌に収録しないこととなっておりますのでご注意ください。

### 〈『英文ジャーナル』投稿についてのお知らせ〉

33号の特集テーマは“mobility/immobility”です。投稿原稿応募申し込み（論文要旨）の締め切りは2021年1月、原稿締め切りは2021年5月です。特集テーマの他、自由論題による投稿も受け付けます。詳しい日程については、11月の会報（あるいはそれ以前は学会ホームページ）をご覧ください。投稿者はアメリカ学会の会員に限ります。なお『アメリカ研究』との二重投稿、あるいは日本語、英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

英文ジャーナル編集委員会

## 新入会員（2020年7月1日現在）

|               |                              |       |
|---------------|------------------------------|-------|
| 長岡節子          | 九州工業大（講）                     | 政 経 思 |
| 松田卓也          | University of North Texas（院） | 文 化 ジ |
| 遠藤郁子          | 法政大                          | 文 日   |
| 田ノ口正悟         | 早稲田大                         | 外 日 政 |
| 石本凌也          | 同志社大（院）                      | 文 化 芸 |
| 後藤篤           | 京都市立大                        | 類 衆 文 |
| Robert Yeates | 岡山大学                         |       |

(\* 入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による)

## 編集後記

この編集後記の原稿を三度書き直した。無邪気なエッセイを書いたコロナ以前、緊急事態宣言下の4月、そして少し落ち着くも第二波の懸念が尽きない7月初旬の今。現時点での全世界の感染者数約1,053万人、うち死者51万人以上という圧倒的な数字を前にして、今まで信じられてきた制度と価値の多くが揺らいでくる。

この事態はいつか、終息はしないかもしれないが、収束はする。しかし「ウィズ・コロナ」「アフター・コロナ」の時代は以前と同じとはいかないだろう。その時、アメリカは国際社会でいかなる位置づけにあるのか。中国に隣接する日本はどうあるのか。そして、我ら日本のアメリカ研究者はどのような働きができるのか。

(常山菜穂子)

2020年7月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 宇 沢 美 子

編集人 中 野 勝 郎

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5